

番号	解答	解説
<b>Ⅲ 症状からみた主な副作用</b>		
[1]	1	a 誤 皮膚粘膜眼症候群（スティーブンス・ジョンソン症候群）の発症機序の詳細は不明であり、また発症の可能性がある医薬品の種類も多いため、発症の予測は極めて困難である。 b 誤 中毒性表皮壊死融解症（TEN）は、38℃以上の高熱を伴って広範囲の皮膚に発赤が生じ、全身の10%以上に火傷様の水疱、皮膚の剥離、びらん等が認められ、かつ、口唇の発赤・びらん、眼の充血等の症状を伴う病態で、最初に報告をした医師の名前にちなんでライエル症候群とも呼ばれる。 c 正 d 正
[2]	1	a 誤 ショック（アナフィラキシー）は、生体異物に対する即時型のアレルギー反応の一種であるが、発症後の進行が非常に速やかなことが特徴である。 b 誤 発症の可能性がある医薬品の種類も多いため、発症の予測は極めて困難である。 c 正 d 正
[3]	3	a 正 b 誤 発生頻度は、皮膚粘膜症候群は人口100万人当たり年間1～6人、中毒性表皮壊死融解症は人口100万人当たり年間0.4～1.2人と報告されている。 c 正 d 誤 両疾患ともに、原因医薬品の使用開始後2週間以内に発症することが多いが、1カ月以上経ってから起こることもある。
[4]	1	a 正 b 正 c 正 d 誤 偽アルドステロン症は、医薬品と食品との間の相互作用によっても起きることがある。
[5]	4	a 誤 最初に報告をした2人の医師の名前にちなんでスティーブンス・ジョンソン症候群とも呼ばれる。ライエル症候群は中毒性表皮壊死融解症。 b 誤 発症機序の詳細は不明であり、また、発症の可能性がある医薬品の種類も多いため、発症の予測は極めて困難である。 c 正 d 正
[6]	1	1 正 2 正 3 正 4 誤 両疾患ともに、原因医薬品の使用開始後2週間以内に発症することが多いが、1カ月以上経ってから起こることもある。
[7]	3	a 誤 医薬品によるショックは、以前にその医薬品によって蕁麻疹等のアレルギーを起こしたことがある人では起きる可能性が高い。 b 正 c 正
[8]	5	a 誤 ショック（アナフィラキシー）は、生体異物に対する即時型のアレルギー反応の一種である。 b 誤 偽アルドステロン症とは、副腎皮質からのアルドステロン分泌が増加していないにもかかわらず体内に塩分（ナトリウム）と水が貯留し、体からカリウムが失われることによって生じる病態である。 c 誤 皮膚粘膜眼症候群と中毒性表皮壊死融解症は、いずれも発症機序の詳細は不明であり、発症の予測は困難である。 d 正
[9]	4	ア 誤 偽アルドステロン症は、体内に塩分（ナトリウム）と水が貯留し、体からカリウムが失われることによって生じる病態であり、副腎皮質からのアルドステロン分泌が増加していないにもかかわらずこのような状態となることである。 イ 正 ウ 正 エ 正
[10]	3	1 正 2 正 3 誤 肝機能障害のうち、アレルギー性のものは有効成分に対する抗原抗体反応が原因で起きる。 4 正
[11]	3	a 誤 医薬品により生じる肝機能障害は、有効成分又はその代謝物の直接的肝毒性が原因で起きる中毒性のものと、有効成分に対する抗原抗体反応が原因で起きるアレルギー性のものに大別される。 b 正 c 誤 黄疸とは、ビリルビン（黄色色素）が胆汁中へ排出されず血液中に滞留することにより生じる。

番号	解答	解説
[12]	2	a 正 b 正 c 誤 偽アルドステロン症は小柄な人や高齢者で生じやすく、 <u>原因医薬品の長期服用後に初めて発症する場合もある。</u> d 正
[13]	3	a 正 b 誤 黄疸とは、ビリルビン（黄色色素）が胆汁中へ排出されず血液中に滞留することにより生じる、皮膚や白眼が黄色くなる病態である。 c 正 d 正
[14]	5	a 誤 皮膚粘膜眼症候群と中毒性表皮壊死融解症は、いずれも原因医薬品の使用開始後2週間以内に発症することが多く、 <u>1カ月以上経ってから起こることもある。</u> b 正 c 正 d 正
[15]	1	a 誤 偽アルドステロン症とは、アルドステロン分泌が増加していないにもかかわらず体内に <u>塩分（ナトリウム）と水が貯留し、体からカリウムが失われること</u> によって生じる病態である。 b 正 c 正
[16]	1	a 正 b 正 c 正 d 誤 副腎皮質ホルモンの1つであるアルドステロンは、体内に塩分と水を貯留し、カリウムの排泄を促す作用があり、 <u>電解質水分の排出調節の役割を担っている。</u>
[17]	1	a 正 b 正 c 正 d 誤 精神神経症状は、 <u>医薬品の大量使用や長期連用、乳幼児への適用外の使用等の不適切な使用がなされた場合に限られず、通常の用法・用量でも発生することがある。</u>
[18]	5	体内のナトリウムと水が貯留し、体からカリウムが失われることによって生じる病態である。副腎皮質からのアルドステロン分泌が増加していないにもかかわらずこのような状態となることから、 <u>偽アルドステロン症と呼ばれている。</u> 主な症状に、手足の脱力、 <u>血圧上昇、筋肉痛、こむら返り、倦怠感、手足のしびれ、頭痛、むくみ（浮腫）、喉の渇き、吐きけ・嘔吐等</u> があり、病態が進行すると、筋力低下、起立不能、歩行困難、痙攣等が生じる。
[19]	1	a 誤 精神神経症状は、 <u>医薬品の大量服用や長期連用等の不適正な使用がなされた場合に限らず、通常の用法・用量でも発生することがある。</u> b 正 c 正 d 正
[20]	5	a 正 b 正 c 誤 早期に原因医薬品の使用を中止すれば、 <u>速やかに回復し、予後は比較的良好であることがほとんどである。</u> d 正
[21]	4	a 正 b 誤 消化性潰瘍は、胃や十二指腸の粘膜組織が傷害されて、その一部が <u>粘膜筋板を超えて欠損する状態である。</u> c 正 d 正
[22]	3	1 正 2 正 3 誤 無菌性髄膜炎の予後は比較的良好であることがほとんどであるが、 <u>重篤な中枢神経系の後遺症が残った例も報告されている。</u> 4 正
[23]	1	a 正 b 正 c 誤 多くの場合、 <u>発症は急性で、首筋のつっぱりを伴った激しい頭痛、発熱、吐きけ・嘔吐、意識混濁等の症状が現れる。</u> d 誤 過去に軽度の症状を経験した人の場合、再度、 <u>同じ医薬品を使用することにより再発し、急激に症状が進行する場合がある。</u>

番号	解答	解説
[24]	3	1 正 2 正 3 誤 多くの場合、発症は急性で、首筋のつっぱりを伴った激しい頭痛、発熱、吐きけ・嘔吐、意識混濁等の症状が現れる。 4 正
[25]	4	a 誤 精神神経症状は、医薬品の大量服用や長期連用、乳幼児への適用外の使用等の不適正な使用がなされた場合に限らず、 <u>通常の用法・用量でも発生することがある。</u> b 正 c 正 d 誤 無菌性髄膜炎は、 <u>大部分はウイルスが原因</u> と考えられているが、医薬品の副作用等によって生じることもある。
[26]	2	1 正 2 誤 精神神経症状が現れるのは、適用外の使用等の不適正な使用がなされた場合に限らず、 <u>通常の用法・用量でも発生することがある。</u> 3 正 4 正
[27]	1	ア 正 イ 正 ウ 正 エ 正
[28]	2	a 正 b 正 c 正 d 正
[29]	5	a 正 b 正 c 正 d 正
[30]	3	a 正 b 正 c 正 d 誤 <u>小児や高齢者のほか、普段から便秘傾向のある人は、発症のリスクが高い。</u>
[31]	2	a 誤 間質性肺炎は、 <u>肺の中で肺胞と毛細血管を取り囲んで支持している組織（間質）が炎症を起こしたものである。</u> 記述は、肺炎に関する記載である。 b 正 c 正 d 誤 一般的に、医薬品の使用開始から <u>1～2週間程度</u> で起きることが多い。
[32]	1	1 誤 間質性肺炎は、 <u>肺の中で肺胞と毛細血管を取り囲んで支持している組織（間質）が炎症を起こしたものである。</u> 2 正 3 正 4 正
[33]	1	a 正 b 誤 イレウス様症状は、小児や高齢者のほか、 <u>普段から便秘の傾向のある人は、発症のリスクが高い。</u> c 正 d 誤 イレウス様症状が悪化すると、 <u>腸内細菌の異常増殖</u> によって全身状態の衰弱が急激に進行する可能性がある。
[34]	4	a 誤 間質性肺炎は、 <u>肺の中で肺胞と毛細血管を取り囲んで支持している組織（間質）が炎症を起こしたものである。</u> b 誤 間質性肺炎は、医薬品の使用開始から <u>1～2週間程度</u> で起きることが多い。 c 正 d 正
[35]	3	ア 誤 間質性肺炎は肺の中で肺胞と毛細血管を取り囲んで支持している組織（間質）が炎症を起こしたものである。記述は、肺炎に関する記載である。 イ 正 ウ 正 エ 誤 喘息は、原因となる医薬品の使用後、 <u>短時間（1時間以内）</u> のうちに鼻水・鼻づまりが現れ、続いて咳、喘鳴及び呼吸困難を生じる。

番号	解答	解説
[36]	5	a 誤 間質性肺炎は、一般的に医薬品の使用開始から1～2週間で起きることが多い。 <u>必ずしも発熱は伴わない。</u> b 正 c 正 d 正
[37]	2	a 正 b 正 c 誤 原因となる医薬品の使用後、短時間（1時間以内）のうちに鼻水・鼻づまりが現れ、続いて咳、喘鳴（息をすするとき喉がゼーゼー又はヒューヒュー鳴る）及び呼吸困難を生じる。これらの症状は時間とともに悪化し、 <u>顔面の紅潮や目の充血、吐きけ、腹痛、下痢等を伴うこともある。</u>
[38]	3	a 正 b 正 c 正 d 正
[39]	3	<u>鬱血性心不全とは、全身が必要とする量の血液を心臓から送り出すことができなくなり、肺に血液が貯留して、種々の症状を示す疾患である。</u> <u>不整脈とは、心筋の自動性や興奮伝導の異常が原因で心臓の拍動リズムが乱れる病態で、めまい、立ちくらみ、全身のだるさ（疲労感）、動悸、息切れ、胸部の不快感、脈の欠落等の症状が現れる。</u>
[40]	3	a 正 b 誤 医薬品を適正に使用した場合であっても、 <u>動悸（心悸亢進）や一過性の血圧上昇、顔のほてり等を生じることがある。</u> c 正 d 正
[41]	3	a 誤 間質性肺炎は、 <u>医薬品の使用開始から1～2週間で起きることが多い。</u> b 正 c 誤 喘息は、合併症を起こさない限り、原因となった医薬品の有効成分が <u>体内から消失すれば症状は寛解する。</u> d 正
[42]	1	a 正 b 正 c 誤 医薬品による排尿困難や尿閉の症状は、 <u>男性に限らず女性においても報告されている。</u> d 誤 医薬品による排尿困難や尿閉の症状は、多くの場合、原因となる医薬品の使用を中止することにより症状は速やかに改善するが、 <u>医療機関における処置を必要とする場合もある。</u>
[43]	2	a 正 b 誤 医薬品による排尿困難や尿閉は、 <u>前立腺肥大等の基礎疾患がない人でも現れることが知られており、男性に限らず女性においても報告されている。</u> c 正 d 正
[44]	4	<u>副交感神経系の機能を抑制する作用がある成分が配合された医薬品を使用すると、膀胱の排尿筋の収縮が抑制され、尿が出にくい、尿が少ししか出ない、残尿感がある等の症状を生じることがある。</u>
[45]	1	眼球内の角膜と水晶体の間を満たしている <u>眼房水</u> が排出されにくくなると、眼圧が <u>上昇</u> して視覚障害を生じることがある。 例えば、抗コリン作用がある成分が配合された医薬品によって眼圧が <u>上昇</u> し、眼痛や眼の充血に加え、急激な視力低下を来すことがあるため、特に <u>緑内障</u> がある人では <u>厳重な注意</u> が必要である。
[46]	3	a 誤 <u>接触皮膚炎は原因と考えられる医薬品の使用を中止すれば通常は1週間程度で症状は治まるが、再びその医薬品に触れると再発する。</u> b 正 c 正 d 誤 <u>蕁麻疹は強い痒みを伴うが、それ以外の場合は痒みがないか、たとえあったとしてもわずかなことが多い。</u>
[47]	1	a 正 b 誤 アレルギー性皮膚炎は、発症部位は医薬品の <u>接触部位に限定されない。</u> c 誤 接触皮膚炎は、原因と考えられる医薬品の使用を中止すると通常は1週間程度で症状は治まるが、 <u>再びその医薬品に触れると再発する。</u> d 誤 <u>光線過敏症が現れた場合は、原因と考えられる医薬品の使用を中止して、皮膚に医薬品が残らないよう十分に患部を洗浄し、遮光（白い生地や薄手の服は紫外線を透過するおそれがあるので不可）して速やかに医師の診療を受ける必要がある。</u>

番号	解答	解説
[48]	2	a 正 b 誤 c 正 d 誤 あらゆる医薬品で起きる可能性があり、同じ医薬品でも生じる発疹の型は人によって様々である。 薬疹は医薬品の使用後1～2週間で起きることが多いが、長期使用後に現れることもある。
[49]	4	a 正 b 正 c 正 d 誤 光線過敏症の症状は、医薬品が触れた部分だけでなく、全身へ広がって重篤化する場合がある。
[50]	1	ア 正 イ 正 ウ 正 エ 正